

ヘンリー・フュースリの詩的模倣論と人体造形 —観相学による身体デザイン化—

松下 哲也 (國學院大學)

ヘンリー・フュースリ(1741-1825)は、『画法講義』(1801)において、J・C・ラファーター『観相学論』(独語版 1775-78、英語版 1789-98)の論理を応用した絵画制作の方法論を頻繁に講義している。本発表では、フュースリが志向していた「詩的模倣」(poetic imitation)による絵画制作が観相学の応用によって実現されうるという見解に至るまでの芸術思想の変遷を踏まえ、それが彼の作画理念として実際の画面にいかにか反映されたかを検証する。

最初期のフュースリがJ・J・ボードマー、J・J・ブライティンガーらに師事し、多大な影響を受けていたことは多くの先行研究が指摘している。フュースリは、文学は自然の模倣である以上にG・W・ライプニッツ的な可能世界の模倣であるとした彼らのロマン主義的な文学論を美術にも適用し、神が創造しえたが現実にはしなかった、ありうるべき世界を模倣する芸術のあり方を「自然模倣」に対比して「詩的模倣」と呼んだ。しかし、この芸術論の詳細はG・E・レッシング著『ラオコーン』を受けて変容する。フュースリが『アナリティカル・レビュー』誌に寄せた評論によれば、1788年6月の記事ではシモニデスの銘文「絵は黙せる詩、詩は語る絵」を冒頭に引用した上で「絵画における方法は文筆におけるものと同じである」と明確に宣言している。しかしながら1793年1月付、続いて1794年11月付の記事ではレッシングの主張する通り、文芸と造形美術は明確に区別されなければならないとの見解を明らかにしているのである。以上の経緯から、いずれかの時点でフュースリの芸術論が転換していると指摘できる。時間芸術と空間芸術は明確に区別されるべきであるという見解は1801年の『画法講義』においてはまったく疑いの余地のないものとして扱われているからである。しかしその制限の中でのなご詩的模倣による絵画を追求しようとする彼は、その解をラファーター観相学の美術的応用に求めた。物語の登場人物の持つべき性質や行為、魂は持続的、時間芸術的なものであり、観相学はこれら「精神的要素」が身体の形態として視覚化されるという考え方に立脚している。したがって、これらを模倣しその形態を絵画化することこそが詩的模倣の実現であるとの考えに至ったと解釈できるが、これを視覚的に捉えた研究は十分に為されていない。

フュースリは、上記の論理を獲得するに至ったであろう1790年代にW・シェイクスピアの『夏の夜の夢』に主題を取った妖精画の一群を発表した。これらの作品には、各登場人物を描写する際、アトリビュートに多くを拠るのではなくむしろ人体比例の定義を徹底することで彼らの同一性を保持しようとする傾向が見られる。観相学の応用による身体デザインの追求こそが詩的模倣絵画であるとするこのフュースリの作画理念は、まったく同一の構図、身体、表情によって描かれた2幅の作品《妖精マブI》(1793)および《妖精マブII》(1815)の存在によって視覚的に一層明らかとなるのである。